



採鉱

環境
自然16
まいんやまとまぶ
大和間符昔のおもむきをそのままに
現在の大和間符やまとまぶ
大和間符は、
元禄時代の古い坑道の
跡で、人一人がやっと
通れるくらい狭いもの
です。大^{だい}露^ろ頭^{とう}
あか緒^{あか}くてそこは雪積ま^{やまぐち}ず
誓^{せい}子^こ

元禄8年(1695)4月、大和間符は立川銅山(当時は
さいじょうはん 角石原側の銅山)の大黒間符と地中で偶然に
貫通し合ったことにより、境界争いとなって紛糾した歴史
をもっています。

双方とも抜きあった地点が自分たちの領分である
と主張し譲らないために訴訟となりました。

元禄10年、境界紛争は江戸幕府が分水嶺を境とす
ることで決着し、別子銅山の訴えが認められました。

その後、立川銅山は、
経営不振から宝暦12
年(1762)別子銅山に
吸収合併されました。



今も山中に残る大露頭



露頭に咲くアカモノ

銅鉱石の案内役
ヘビノネコザ

工都新居浜を生み育てた別子銅山

ろとう
露頭の中央やその周辺に生えているのは、ヘビノネ
コザといわれる植物です。

ヘビノネコザという名前の由来は、群生した株の間
にヘビがとぐろを巻いているように見えることからつ
いた名前だそうです。

ヘビノネコザは鉱山付近など他の植物が育ちにくい
所に生え、銅やカドミウムなど重金属を好むことから
鉱産物の指標といわれています。

そのため、鉱山師は昔からヘビノネコザを銅鉱石を
探す目印にしていました。

